

國學院大學學術情報リポジトリ

編集後記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進センター メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2285

編集後記

研究開発推進センター『研究紀要』第三号では、本センターで実施している研究プロジェクトの成果を中心に、九本の論考を掲載することができた。

巻頭に掲載した三論文は平成十八年より開催している「慰霊と追悼」研究会の成果によるものであり、今回は共同研究員の津田・佐藤両氏からの寄稿を得た。

津田氏の論文は、靖国神社・護国神社の起源である招魂社の原型として長州藩における招魂祭祀の展開過程をあとづけるとともに、招魂社祭神の性格について、厳密には戦死者の「霊」ではなく、戦死者の「神霊」を祀っているものであると論じるなど、幕末長州藩における招魂祭祀を、神道史のみならず神観念の問題からも捉えようとする意欲作。

また、佐藤氏の論文は、第二十回「慰霊と追悼」研究会での報告を基にしたもので、近代における明治神宮と靖国神社のそれぞれの境内風致や展示施設、参拝現象を比較し、そこに共通してみられる「慰霊」「顕彰」「崇敬」の様相について丹念に分析を加え、祭神に対する「慰霊」「顕彰」から「崇敬」へと動的な展開を描いた、刺激的な労作となっている。

中山論文は、ビルマ戦線から生還した兵士の著した戦記を事例として取り上げ、戦

地からの生還者の戦争体験を「異界体験」として捉えた上で、生還兵士による戦没戦友に対する慰霊を支える観念が、生死を越えた兵士としての共同性に支えられていると論じたものである。

中村論文は、明治五年の湊川神社創建を嚆矢とする、史上に勲功を残した人物を祀った別格官幣社の創建事情と、その歴史的背景について考察したものである。数社を事例として取り挙げながら、祭神に対する崇敬の歴史と精神性の長い営みを検証している。また、当該期の神祇行政に於ける国学者の霊魂への認識についても触れている。

宮本論文は、幕末・明治期の国学者で桂園派歌人でもあった八田知紀の著作『神典疑問辨』（河野省三文庫所蔵本）を翻刻し、その内容を分析。本書の「天御中主神」を重視する言説と、八田の『大理論』『桃園家訓』などの著作における言説との比較から、その思想的展開を考察した。

戸浪論文は明治初期、国民教化運動を担った教導職の神道観の一端を、田中知邦の『示蒙教導二条略弁』を通して考察したものの。当時、神道家の多くが提唱していた「造化（鎔造）説」の立場に立ちながらも、全体的に「天照皇大神」重視の神道観である事を指摘した。

加瀬論文は近年急速に研究が進んでいる「中世日本紀」に関し、本学図書館所蔵の『日本記聞書』を取り上げて、その内容や主

要な箇所の特徴について考察を加え、中世後期に多様な神道書が成立することの背景を探る。なお、センターでは平成二十年度の事業として、学内学術資産を活用した神道・神社研究プロジェクトを実施しており、加瀬論文はこの事業の成果による。

太田の資料紹介は、上賀茂神社旧供僧家所蔵の資料（京都市歴史資料館架蔵写真帳）を、解題を加えて翻刻したもの。同史料は二十一世紀COEプログラム調査で収集したものであり、センターでは前近代における神仏関係の実態理解を目的として、平成十八年度に輪読会を行った。今回の紹介は輪読会の成果を引き継いだものである。

菅論文は、「神道指令」に影響を与えた米国人学者D・C・ホルトムの神道研究の方向性に関して、彼の宣教師・教育者としての経歴との関連に注目し、考察を試みたものである。今後、本学所蔵の「ホルトム旧蔵書」を参照しながら、彼が同時代の「国家神道」をどのような視座から見ているのか、更に解明していくことが求められよう。

最後に少し宣伝を。先にも触れたように、研究開発推進センターでは学内学術資産を活用した神道・神社研究プロジェクトを進めてきたが、この度、その成果を一書にまとめ、『史料から見た神道―國學院大學の学術資産を中心に』（弘文堂、定価五六〇〇円）として刊行することができた。ご一読いただければ幸いです。（太田）